
不要命回収車

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不要命回収車

【Nコード】

N9303F

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

不要な命を回収する、とある団体のお仕事話。

「不要な命はありませんか」

死人のような肌の色をした男が、マンションの一室を訪ねた。

帽子を目深に被っているので表情はわからないが、声色は陽気だ。応対に出たその家の女房は、早速家の中に戻ると、小さな箱を持つてきた。

「うちの台所に出たネズミです、引き取ってください」

男はそれの匂いを嗅ぐと、何か言いたげに口を噤んだ。

しかし、これ以上いても仕方ないと思ったのか、一礼すると去ってしまった。

一つ気持ち悪いものが消えたと喜ぶ母親。
だが休んではいられない。

台所からは、母を呼ぶ息子の声がする。

彼女は急いで戻って、呑気な様子で何事かと聞いた。

「ねえねえ、僕のポンたろう知らない？」

「ポンたろう？」

「友達から昨日貰ったハムスターさ」

「不要な命はありませんか」

病気としか思えない白い肌の男が、アパートの一室にやってきた。目が今にも飛び出しそうなくらい痩せ細り、頭頂部はハゲている。そう聞いた金髪の青年は、少し考えたあとで家の中を探り、発泡スチロールの箱を持つてきた。

中身を見ると、そこには生まれたての赤ん坊がいた。

「ああ、ダメですよ、死んでるのは」

そう白い肌の男がいうと、金髪の青年は目を真っ赤にして怒った。
「良く心臓の音を聞いてみる！ 虫の息で生きてるだろうが！」

「不要な命はありませんか」

人間とは思えないような、青い顔をした男が一軒家を訪ねた。

誰か遊びにきているのか、家の中がどうもやかましい。

一家の心の支えである肝っ玉母ちゃん。少々思案した後、手を叩きながら家の中に戻った。

そして、鼻水を垂らしながら大暴れしている少年を一人捕まえて、客人によこしてみせる。

「何すんだよ、母ちゃん！」

「勉強もしないで人の財布から金取るような奴は、不要だから引き取ってもらうんだよ」

「ひでえ、イクジホーキだぜそんなの！」

「うるさい。貧乏神が宿ってる父ちゃんだけでも大変だったのに、飯食って金取るばかりのアンタは邪魔なのよ！ 早く連れて行ってください」

「ウソだろ？ おい、母ちゃん！ 母ちゃん！ うわああああああん！」

とりあえず引き渡されたので、男は躊躇なく子どもを連れて行っ

た。

「不要な命はありませんか」

どう見ても白骨にしか見えない老人が、大きな屋敷を訪ねた。

召使らしい男が対応すると、まず主に相談すると言って戻っていった。

数分後、召使は台車に乗せて何かを運んできた。

ブルブルと震えるそれは、少し恰幅の良い、下着姿の男だった。

「坊ちゃん引き籠もりでして……これ以上家に居座られても邪魔だから捨てろ、と」

召使はハンカチで涙を拭いながらそう言った。

白骨のような老人は、貰い泣きしたのか鼻水を拭くと、その台車を引き取った。

坊ちゃんは大ダ震えるだけで、何も抵抗しなかった。

「不要な命はありませんか」

今にも解けて消えてしまいそうなくらい陰気な女性が、二階建ての家を尋ねた。

それを聞いた婆さんは、嬉しそうに家の中に戻ると、一匹の子犬を差し出した。

女は、少し不思議そうな顔をしたが、それが躊躇っているように見えた婆さんは、途端に喚き始めた。

「朝から晩までキャンキャンうるさいし、人の食事は盗むわ大事なものは噛み壊すわ。あげくにトイレもなかなか覚えないうし、そんなバカ犬邪魔なだけで、うちにはいらんのだよ！」

その騒ぎを聞きつけて、家族全員が集まった。

事情を聞いた途端、父親が顔を真っ赤にしながら婆さんを殴り倒し、女性から子犬を取り返した。

中学生の長女と小学生の長男が子犬に駆け寄り、母親も心配そうに腰をおろした。

「不要というならババアの方だ！　いつまでも寄生虫みたいにウチで文句垂れやがって！」

「なんだって？　アンタ、母親に向かってそんな口を叩くのかい！」

「うるせえ！　もうババアのせいでストレス溜めるのはうんざりだ！　おい、コイツを引き取ってくれ！」

女性はそう聞くと、老婆を羽交い絞めにした。

「コラ！　やめなさい！　誰が今まで育ててきたと思ってるの？　やめなさい！　ぎゃあああああ！」

背中に膝蹴りを食らった婆さんが、ガックリと力なくうな垂れる。そして一家は、自分の家に老婆などいなかったかのように笑いアウト、自宅へ戻っていった。

「不要な命はありませんか」

道端で、変に猫背になった少年が女性に聞いた。

化粧が濃い女性は少し考えると、思いついたように目を光らせて言った。

「うーん、とりあえずこの国の政治家じゃない？」

そう聞いた少年は、携帯電話で何か連絡し始めた。

途中、仲間の不要命回収車に乗り込むと、運転手に行き先を指定した。

「永田町行って」

全国各地の不要命回収車が、国会議事堂へと向かっていった。

それから、各地で集まった不要命は、回収員によって動物と人間に区分けされた。

自然に戻れそうな動物は自然に帰した。

彼等妖怪にとって、動物の魂はあまり力にならないから、人間が少ない時にしか必要ないのだ。

だから、人間がたくさん取れた日は、こうして野に放たれていく。残った人間達は檻に入れられ、ある部屋へと迫る壁で強制的に誘導された。

その部屋の名前は、ドリームルーム。

人間達はガス室で殺されて、新鮮なままの魂を抜かれて、美味しく頂かれるのだ。

(後書き)

知ってください。不要ペット回収車。

<http://www.shomei.tv/project-345.html>

とまあ、憤りだけで書きました。
もっと上手く書けたんじゃないかと思うと悔しいので、また別の形で書けたらいいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303f/>

不要命回収車

2010年10月8日15時16分発行